

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter 2007.12 No.18 CONTENTS

第3回国際シンポジウムにむけて 3

場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平

An Invitation to The Third International Symposium of Our Program

Memories Inscribed in Places and the Body : New Horizons in the Study of Nonwritten Cultural Materials

- 大里 浩秋 OSATO Hiroaki
- 橘川 俊忠 KITSUKAWA Toshitada
- 佐野 賢治 SANNO Kenji
- 中村 ひろ子 NAKAMURA Hiroko
- 西 和夫 NISHI Kazuo
- 廣田 律子 HIROTA Ritsuko
- 前田 禎彦 MAEDA Yoshihiko
- 山口 建治 YAMAGUCHI Kenji (司会)

第3回国際シンポジウム プログラム詳細 9

特集

若手研究者からのレポート

Voices of Young Scholars

- 1 日本非文字文化研究および保護の 10
実践に関する調査研究
神奈川大学COEプログラムと小澤昔ばなし研究所を例に
西村 真志葉 NISHIMURA Mashiba
- 2 武士道をめぐる私の2週間 12
ベネシュ・オレグ BENESCH Oleg
- 3 大学生の環境認識 自然地理学の講義現場から 14
藤永 豪 FUJINAGA Go
- 4 煙突のなかの手紙 16
土田 拓 TSUCHIDA Taku
- 5 画像学研究的課題 17
佐々木 弘美 SASAKI Hiromi
- 6 『旅行雑誌 (China Traveler)』について 18
王 京 WANG Jing
- 7 浮世の麗しい影 浮世絵の美人絵略論 19
衣 曉龍 YI Xiaolong
- 8 香港における日本のテレビドラマ 20
王 志垣 WONG Chi Hang
- 9 上海で見た、“ものを運ぶ方法” 22
坂井 美香 SAKAI Mika
- 実験展示開催報告 24
- 主な研究活動 24
- 受贈資料一覧 26
- 彙報 27
- Information 28

表紙説明



日本常民文化研究所には、150点ほどの縮尺五分の一の着物のひな型がある。これらの資料は同研究所所蔵の「濫澤写真（昭和10年前後の生活文化の記録写真）から仕立てをよみとり、あるいは同研究所刊行の報告書の図面から作成したものになる。仕立ててくださったのは、昭和11年に長野県佐久市に生まれた白石ナツ子さん（現東京都在住、写真右）。なお、表紙で紹介したもので、現在データがはっきりわかっているものは

- ① 長着 青森県
- ② モンペ 茨城県
- ③ ハンテン 宮城県
- ④ スッポ 福島県
- ⑤ ソデナシ 青森県
- ⑥ タツケ 青森県
- ⑦ ミツ身
- ⑧ ミハバマエカケ 山口県
- ⑨ 写真は北海道幌別郡幌別村（現登別市）のもの。昭和11年写。（香月洋一郎）



第3回国際シンポジウムにむけて

場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平

OSATO Hiroaki
大里 浩秋

KITSUKAWA Toshitada
橘川 俊忠

SANO Kenji
佐野 賢治

NAKAMURA Hiroko
中村 ひろ子

NISHI Kazuo
西 和夫

HIROTA Ritsuko
廣田 律子

MAEDA Yoshihiko
前田 禎彦

YAMAGUCHI Kenji
山口 建治
(司会)

An Invitation to The Third International Symposium of Our Program Memories Inscribed in Places and the Body : New Horizons in the Study of Nonwritten Cultural Materials



山口 「第3回目の国際シンポジウムが来年の2月23、24日の両日開かれます。その準備に当たっていただいている方々に、今日はお集まりいただき、最終年度に開かれるこのシンポジウムのねらいなどを自由にお話しいただき、気運を大いに盛り上げていければと考えています。

テーマは「非文字資料研究の新地平」、副題は「場の記憶・からだの記憶」となっています。実施委員会の内部でこのテーマを決めるまで、だいぶ時間がかかったわけですが、最終年度のシンポジウムということで、これまでの研究成果をまとめるだけでなく、その研究成果を発信する、「発信」ということを重要なテーマにしてください、ということが拠点リーダーの福田先生から要請されていました。

また、今まで各パートで行われていた研究成果をまとめ統合する、ということもコンセプトにすべきという意見が出されました。体系化が難しいとしても、この統合と発信ということ、十分に織り込んだ内容にしようという話になり、いろいろ議論した結果、最終的には、「場の記憶・からだの記憶」という内容でやることになりました。

身体技法はCOEの一つの大きなテーマですが、身体技法、つまり人間の身体の中に記憶、蓄積されている様々な文化と、身体の外といいますか、空間的な広がりや場所や地域、景観に刻印された人間の活動の記憶、大きく分けるとすればそういうことではないかと「場の記憶・からだの記憶」という副題をつけたわけです。

しかも3回目の最終年度のシンポジウムということで、この5年間のCOEの総括の意味合いをこめて、最終日にはかなり長時間の総合討論の時間も設けてあります。そ

の総合討論については、佐野先生と橘川先生に司会をお願いしており、今日の座談会にもご参加いただいております。また初日の司会者の西先生にもおいでいただいております。

それでは最初に、各セッションの責任者の方に、シンポジウムの内容はこんなことを考えている、ということをそれぞれお話ししていただければと思いますが、まずはセッション1のマルチ言語版絵引編纂の前田先生から、今回のシンポジウムについての抱負などお話しいただければと思います。



前田 1班では「図像資料の体系化と情報発信」をテーマに活動していますが、その前提となっているのが、COEの母体である日本常民文化研究所が、今から40年あまり前に編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『生活絵引』)です。1班では、その成果というものを継承して、日本の近世、中国、韓国それぞれの図像を取り上げて、まったく新しい「絵引」をつくるという作業を行っているわけです。その一方で、マルチ言語版『生活絵引』の作成にも取り組んでいます。これは、全5巻ある『生活絵引』のうち、当初は3巻の予定だったのですが、結局作業の困難さから2巻になってしまいましたけど、第1巻と第2巻について、英語・日本語・中国語・韓国語の4カ国語によるマルチ言語版『生活絵引』を作成するという仕事です。『生活絵引』の各項目は、中世の絵巻から抜き出した図と、それに付けたキャプション・解説から成り立っているのですが、その全体を英訳した「本文編」と、キャプションの語彙を英語・日本語・中国語・韓国語の4カ国語で表現した語彙対照表を中心とする「語彙編」と



をセットにして作成しています。現在、ようやく第2巻の本文編・語彙編を発行し終え、第1巻の本文編・語彙編の発行に取りかかっているところです。このように、1班の仕事は『生活絵引』という貴重な過去からの遺産をもとに、翻訳を通して「絵引」という方法を世界に紹介・発信するという意味をもつマルチ言語版の作成と、「絵引」という方法の価値と可能性を明らかにするため、それを日本近世、中国、韓国の図像に応用して新しい「絵引」を作り出すという二つの側面をもっているのだと思います。これまで2回のシンポジウムでは、このうち後者、つまり新しい「絵引」の作成をめぐるセッションが積み重ねられてきましたので、今回は、ようやく完成したマルチ言語版を素材に、我々の仕事の原点ともいえる『生活絵引』本体の価値であるとか、あるいは翻訳という作業を進めていくうちに明らかになってきた問題点などを取り上げて報告し、考えてみるというのが、ここでのセッションの内容ということになります。

山口 どうもありがとうございました。抱負はいかがですか。

前田 セッションの目的の一つは、せっかく苦労して作ったものですから、とりあえずは完成したマルチ言語版の内容、つまり出来映えとか完成度とかを検証してもらいたいと思います。いろいろ問題だらけであることは私もよく承知はしているのですが、そういった問題点について客観的で建設的なご意見を賜りたいという気持ちがあります。もう一つは、日本語や日本文化に関する知識があまりないため、これまで『生活絵引』に触れることのなかった外国の方々が、このマルチ言語版を手にして、そこからどのような関心と可能性を汲み取ることができるのかということにも大いに興味をもっています。1班の仕事は、「絵引」という方法を世界に発信するという意味をもっているわけですから、やや大げさに言えば、世界の図像に対する応用の可能性なども探していきたい、というのが抱負・希望ということになるのではないかと思います。

山口 ありがとうございました。では、セッション2の大里先生お願いします。



大里 セッション2のテーマは「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」というものです。私たちのグループは、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」を目指していますが、そのうちの災害の痕跡につい

ては、具体的には江戸の大火や関東大震災を取り上げて、2年前の第1回シンポジウムで報告を行いましたし、独自のシンポジウムも開いていますので、今回は中国の旧日本租界について調べているメンバーと、海外社社のことを調べているメンバー、さらに朝鮮における倭城のことを調べているメンバーが報告することになりました。

租界については、主に上海と、租界ではないのですが、それに近い特権を日本人が持っていた青島の事例を挙げて、日本人が経営する紡績工場に働く日本人職員の宿舍と中国人労働者の宿舍の現況調査、およびそれらを建設した当時の図面等を比較しながら、建物に込めた日本人の意図やその後の建物の変遷から読みとれるものは何かを明らかにしようというものです。他に、漢口の日本租界について、そこに住んだ日本人が保存していた資料を使って、当時の状況を再現し分析することを目指した報告もあります。

それから神社です。日本人が渡った先には神社ありで、海外の色々な地域に神社を建てたのですが、その中で今回は、旧満洲（中国の東北地方）に残っている神社やその痕跡を取り出し、それらの建物がどんな意図で造られ、どんな特徴を持っているのかを明らかにします。もう一つ、豊臣秀吉軍が朝鮮に出兵した際にその出城として建てた倭城の遺跡を調査して、それと大阪城に代表される近世の城郭とを比較することで、両者の違いから読みとれるものは何かを主眼にした報告もあります。

こうした内容の報告は、従来の研究ですと、文字資料を主とし現地調査や図面を従として利用するものがほとんどだったと思うのですが、今回は非文字資料研究を念頭に置いて報告する予定ですので、注目してください。

山口 では、セッション3の佐野先生。



佐野 今回のシンポジウムの目的、5年間の成果をどのように公開・発信していくかについて、地域統合情報発信班は、「インターネット・エコミュージアムの可能性」をメインテーマ、サブタイトルを「地域研究と情報学の連携」としてセッション3で発表します。まず、図像、景観、身体

技法の質の高い大量のデータを有する福島県南会津郡只見町の非文字資料群をコンテンツ化したものをウェブ上の事例で披露します。共同でシステム開発にあたった岡山のコンテンツ(株)の小野博さんに解説を頼みました。只見町を選んだ理由は、地域住民の協力はもとより、15年間に及び町史編纂事業が終了し、各種文書・民具・写



真をはじめとした映像資料から地質、動植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその関係性・体系性が全16巻の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通せるからです。さまざまな地域情報をクロスさせることにより只見という山村の構造性を浮かび上がらせる手法について、例えば田植えで実際に使われる民具を近世農書の記載・絵図と対照し、早乙女踊の田植えの所作と実際の農作業の姿勢をモーションキャプチャで提示、図像、景観、身体技法を統合的にクロスさせるなど、第1発表者の佐野がいくつかの事例を紹介した後、只見町の住民自らが整理した約8000点の民具のデータベースを地域情報と結合させ、どのようなことが言えるのか、情報工学の立場から第2発表者、神奈川大学の木下宏揚先生が報告します。

只見町の地域性をインターネット上で博物館化する試みに対して、続く第3、第4の発表は、千葉県市川市で地域の文化資産を活用したオープンミュージアム、情報発信型教育の構築を試みている千葉商科大学の朽木量先生、ベトナム・ハノイの都市形成史を中心に時空間情報の検索・可視化に関する方式研究を進めている、京都大学の柴山守先生のお二人がそれぞれの立場から事例を報告し、地域情報をインターネット上で統合的に発信するシステムとその有効性についての問題点を指摘します。

コメンテーターとして、中国の文化生態村の運営にかかわっている尹紹亭先生、韓国の民俗村・民俗文化財の実態に詳しい任章赫先生のお二人が、発表に対するコメントに加え、実際のエコミュージアムの活動に照らして、インターネット・エコミュージアムの可能性と問題点を指摘します。エコミュージアムの先進国、フランスからの意見も求めたかったのですが、候補者の都合がつかず今回は断念しました。以上簡単にセッション3のシンポジウムでの構成、内容案を紹介しました。現在、コンテンツ作成の最終段階で、当日作品をどのような形で提示するのかを示せず、具体的イメージがわかかなかったかもしれません。今後の抱負については、後で話します。

山口 それでは、セッション4の廣田先生、お願いします。



廣田 セッション4は「身体技法および感性の資料化と体系化」というテーマです。このテーマは、2班の当初のテーマと一致します。川田順造先生の「身体技法および感性の体系的資料化へ向けて」、廣田律子と海賀孝明さんの「モーションキャプチャ技術と身体技法」、3番目が渡部信一

先生の「民俗芸能の『わざ』はデジタルで伝わるのか？」の3構成になっています。シンポジウムのテーマ「身体技法および感性の資料化と体系化」は、すでに、川田先生が1971年に『無文字社会の歴史』を発表して以来、一貫して研究してきたテーマです。COEのプロジェクトで5年にわたって調査をしてきたデータを更に加えて、あらためて「身体技法および感性の資料化と体系化」をテーマに発表するという事です。COEで川田先生が現地調査を行ったのが、メキシコとモンゴルで、運搬であるとか座法であるとか、それまでの日本、フランス、西アフリカで得たデータと合わせて、モンゴロイドの身体技法のより広い、深い視野の比較検討が進んでいますので、その成果を発表できると思います。感性というのは難しいテーマですけれど、川田先生がフランスで調査を行い、調査の問題をほかの五感との関わりで研究を深めており、感性の問題についても発表が及ぶと思います。この大きなテーマが形になって、明らかになっていくであろうと思います。

テーマに一貫性を持たせるには、「身体技法および感性の資料化と体系化」と「身体技法と感性」の接点をどこに持っていかかということが大切ですが、身体技法の研究作業として芸能の身体技法を、モーションキャプチャによってデータ化、定量化を進めることで、具体的に取組んでできました。これは、2番目の廣田と海賀さんの発表につながりますけれども、今までデータ化できた中国の儺戯のデータ、観世流能楽師の関根祥人氏のデータ、それから花祭りの演者の伊藤勝文氏のデータを収録しています。編集作業の後、数値データ、グラフデータ、キャラクター画像を利用しながら、データの解析作業を進めています。その解析結果が随分とあがってきていますので、それを今回発表していきたいと思っています。

能楽のように洗練された芸能と民間の芸能との共通点や相違点、民族間での共通点や相違点をデータ化して比較するわけですが、いろいろな切り口で比較するために手間のかかる編集解析作業を、文系と理系の力をあわせて行い、結果を出そうとしているところです。注目していいと思うことは、因子分析という統計学の手法を使って、モーションキャプチャのデータを解析しているところです。例えば、能の演目間の類似度を数値化することで舞いの性格がわかります。中国の儺戯、日本の花祭り、日本の能、3種の舞踊間の類似度を数値化することによって、系統図ができるのです。かなり面白い結果が期待でき、身体技法が資料化を経て体系化する成果を表せるの



ではないかと思っています。

もちろん、感性とつながった部分では、例えば回転とかジャンプの動きのデジタルデータから、天に近づこう神と一体化しようとする人間の感性を浮かび上がらせていけそうだということです。ただこれは検証が必要なので、渡部先生は、一体民俗芸能の技はデジタル化で本当に伝わるのかどうか、私たちの取り組みの可能性を検証してくれると思います。当初大風呂敷を広げてテーマを設定し、私たちが収録解析を進めてきたデータが、意図を持って資料化され、体系化される方向性は見つかったのですが、それが正しいかどうか確認しなければならないと考えるので、このような構成となりました。

山口 では、また後で補足してもらいたいと思います。セッション5の中村先生お願いします。



中村 私たちは「身体技法を展示する」としてセッションをもちます。実験展示班は理論総括班同様最後に編成された班ですので、統合発信のための班といえるかと思っています。もう一つの課題

「高度専門職学芸員養成プログラムの提示」も同時に進めておりますが、今回のシンポジウムは発信を中心テーマにということですので、二つの課題のうちの展示をセッションの課題としました。

展示につきましては前号のニューズレターのインタビューにも答えておりますように、各班が成果をまとめつつある11月という時期に、その成果を統合して発信することは困難ですので、展示の課題を「非文字資料のもつ豊かな世界を展示を通してメッセージする」ということにおきかえて、「あるく 身体の記憶」を展示テーマとして設定しました。

非文字資料である画像・映像から私たちの「あるく」という身体技法を探り出し、それを伝えるという試みです。展示は研究者だけではなく多様な来館者にも伝わるのが求められます。そこで来館者が様々な歩き方を体験することで、それぞれの身体に受け継がれ記憶されている歩きに出会う、すなわち身体技法、ひいては非文字資料の存在に出会う、そんな装置を用意してみたいです。

従来展示という形で提示されることの少なかった、身体技法という非文字資料を展示を通して発信するという試みと同時に、展示あるいは体験ということを通して非文字資料研究にどのような新たな視点が獲得できるのか、その可能性と限界を探る実験になるかと思っていますので、その試行錯誤を「展示をつくる」として報告します。

コメンテーターをお願いした民俗芸能の研究者である笹原亮二先生には、民俗芸能を通して身体技法の記憶と伝承、あるいはその記録と研究といった視点から「身体技法を展示する」ことの意義について、もうお一人の展示評価のご専門の村井良子さんには、実際に展示場で展示評価、来館者調査をしていただき、果たして来館者にメッセージは伝わったのかを検証していただきたいと思っております。

山口 どうもありがとうございました。ひととおりの話ししていただいたのですが、補足がありましたならば、つけ加えてくださっても結構です。最終日には、5年間のCOEの事業活動の総決算という意味で、議論をできればと思っています。この点についてはどうでしょうか。



西 今、お話した内容を、プロジェクトを実施している我々のために発信するのでなく、外からできるだけ大勢の方に来ていただいて、その方たちにも伝えたいです。

山口 今回のシンポジウムでは、COEの研究の成果を発信するということに重点を置いています。地域統合情報発信とか実験展示という形で統合がはかられ、特に4班、5班に期待がかかったわけですが。しかし、統合というのはあまりうまくいかなかった、まあ、非常に難しかったということですね。全体の総括ともかわるのですけれども、橘川先生どうでしょうか。5年間やって、どこがどううまくいって、どこがどううまくいっていなかったのか、最初から加わっていらっしやったので。



橘川 本来は、リーダーが...述べるんでしょけどね(笑)最後の総合討論の司会をやるということですが、今回のシンポジウムでは、これまでの5年間の活動の総括が求められると思っています。総合討論では、非文字資料とい

う言葉を掲げてやってきたので、非文字資料とは何かということを考えなくてはいけないのかなと思います。

ただ、非文字資料という概念を抽象的に定義してもしょうがないので、やり方としては、各班が対象としてきた非文字資料、たとえば画像、景観、身体技法を、どういう視角、方法によって分析・研究してきたか、ということをお話してもらったところから始めたい。そして、今までのそれぞれの専門分野の研究のあり方なり、方法なりが、非文字資料を研究対象に取り込んだことによって、どう変わったのか、どういう新しい問題が生まれてきた



のか、ということについて検討していきたい。

それともう一つは、非文字資料を研究するということ
がどういうことなのかを、文字資料を対象とした研究と
比較し、人類文化の研究という文脈の中できちっと整理
をしてみることも必要ではないか。文字資料というのは、
ある意図をもって書かれたものですから、その書かれた
意図を正確に把握するということが何よりも大切なこと
になります。他方、非文字資料の場合は、非文字資料と
して、表現者の特定の意図があるにしても、それとは別
の意味を発見するという作業が要求される。文字資料の
場合とちょっと違う。そういう意味では、非文字資料が
もっている製作意図とは違う意味を発見するには、専門
分野を異にする複数の研究者が一つの資料を様々な角度
から検討するというような作業が必要ではなかったか。
これは田島先生が、ニューズレターの前号で指摘してい
たことですが、例えば、画像資料をみたとき、歴史学、
民俗学あるいは建築史をやっている人、民具をやってい
る人が、それぞれ違ったところから、さまざまな角度か
ら検討して、一つの専門分野からでは見えなかったよう
な情報を取り出すというようなことです。その結果、新
しい研究分野が生まれるかどうか、新しい発想が出てき
たかどうか、ということを確認したい。

たとえば、身体技法ということで「歩く」という動作
をとりあげる場合、映像化されたもの、写真、画像など
を資料として使う、あるいはモーションキャプチャのよ
うな新しい分析技法を取り入れる。そういうことから、
「歩行学」とでもいべき新しい学問ができるかもしれな
いというようなことです。

もう一つ、総合討論の中でとりあげたいこととして、
研究のための新しい手段としてのIT技術の問題がありま
す。IT技術は、ある現象を記録化する手段、解析、分析
のための手段として、どのような可能性を持っているの
かということ。それから、蓄積した資料を、どういう風に
検索をかけたか、解析したりするのか、各班が各テーマ
にしたがって資料化する手段としてどう使ったか、それ
だけではなくて、発信の方法の問題も含めて、その可能
性をどう考えるべきか、という問題です。我々COEの最
終的な研究成果は、印刷物、すなわち文字の形で出され
るものが多く、非文字資料も文字で表記され、極めて矛
盾している。全く別のコミュニケーションの仕方がある
のかを、各班の研究を元に話を繋げることができたら、
将来に向けた話になると思います。このようなことを今、
漠然と考えています。実際、理論総括班はまだですが、

それぞれで行われたこと、個別化したことを、少し抽象
化、普遍化して提示していただくと非常にありがたいと
思っています。

山口 どうもありがとうございました。橘川先生のお話
をうけて、皆さん、ご意見があればどなたかどうぞ。
大里 非文字資料研究とか学際的研究とか声高に言わな
くても、これまでもそのことを意識して、個人であれ
グループであれ実行していた人はいたわけですよね。だ
けど、非文字資料にこだわって、神奈川大学で日頃顔を
合わせたこともない色々な専門分野の人が集まり、大学
以外の方々の協力も得て、ああでもないこうでもない
と、しんどい突き合わせを5年もやってきた。それは非常に
いい経験をしたんだと、振り返って思います。

私のセッションの場合は、歴史畑の人と建築畑の人が
一緒に現地調査を行ったのですが、同じ建物を眺めるの
でも、建築専門の人の見方には、当然素人には思い至ら
ぬ鋭いものがあって、ふだん現地調査重視を唱えている
私にとっては、それをより充実させるためには、専門が
違う者同士の共同研究が是非とも必要であることをしば
しば実感させられました。その意味で、今回の報告はそ
うした問題や関心をどこまで実践できたかを皆さんに判
断して頂く機会となります。

山口 どうもありがとうございました。佐野先生も、総
合討論の司会者になっています。いかがでしょうか。
佐野 研究成果の発信については、橘川先生が3点ほど
にまとめてくれました。私は、やはり共同研究の進め方
が一番の問題だと思います。日本では共同研究、特に人
文学方面はうまくいかない。共同研究である以上、そ
れぞれの個別研究の単に総和ということではなく、その総
和以上の成果を上げなければ、時間と費用をかけた共同
研究の意味がない。5年間を振り返って反省すべき点は反
省し、次の段階でプラスに変えていくことが大事だと思
います。もともと地域統合情報発信班は、画像、民具、
身体技法、景観の各班の研究成果を、只見という一地域
の資料を統合して発信するシステムを開発するのが役割
でした。

廣田先生のところは、文系と理系の連携をうまく行っ
ているようですが、地域研究と情報工学を結びつけた形
での情報発信をウェブ上で考えたわが班では、私のIT技
術に対する能力不足もあり、著作権からサーバーの帯域
の問題など解決すべき問題が、ソフト面ハード面、山のよ
うに次から次へと出てきました。情報工学の先生方とも
っと密接に連絡を取り合わなければならなかったのです



が、その時間が取れないことも確かでした。情報工学との連携が十分にできなかったことが反省点の一つです。

それから、情報の統合の問題です。先ほどの橘川先生の意見にあわせ、共同研究のあり方を今一度、このシンポジウムで議論するのもよいのではないかと思います。COEプログラムの終了を、今後神奈川大学の共同研究を一步進めるための出発点にするためにも必要です。地域情報の統合でいえば、今回は全16巻の「只見町史」を検索の手がかりにしましたが、日本全国の市町村誌は膨大な数です。地方には行政資料から考古学発掘資料までさまざまな資料があります。それらをデジタル化し、データベース化して検索システムを開発していく糸口を今回は開いたと思います。単に学術資料というだけでなく、地域の人々にとっては、教育や観光資源として活用したり、北原先生の取り組んでいるような、災害情報として応用する道も開けます。インターネットの端末が、パソコンから携帯電話に広がっていることから、将来的にはさまざまな地域情報がその場で得られる可能性も無限に広がると思います。

山口 どうもありがとうございます。今までやっていた研究成果を取り込む、こういうところには、こういう進んだ研究があるというところに、多少たどり着いた、少なくとも、それをどう我々のやっていることに組み込めるかと…。

中村 今回のテーマは情報発信ということですが、漠然と「社会に向けて発信する」というのではなく、当然発信する情報によって対象と方法を選択しているわけですから、COEとしての発信に向けての指針ともいえるべきものを整理しておく必要があるのではないのでしょうか。COEでは刊行、ウェブ上での公開、シンポジウム、そして4班のデジタルミュージアム、5班の展示とさまざまな形での発信をしようとしておりますが、それぞれの発信方法には違いがある。例えば私たちの展示は限られた空間で五感や感性を使い体験という形で参加もしていただく、対象も子どもから大人まで、研究者から学生や地域の人々までを含む、そして発信対象の人々とその場でコミュニケーションが成立する双方向型の発信ということで、他の発信とは異なる点も多い。すべてを情報発信といってひとまとめに議論するのではなく…と思います。

山口 お尋ねしたいんですが、情報発信という場合も、インターネットとかでやっている場合は、誰でもアクセ

スできるというのがメリットであり、対象は誰でもいいんじゃないですか。

西 誰でも、いつでも、どこでも。

山口 誰でもキーワードだけで簡単にアクセスできるというのが、インターネットのメリットですよ。

西 今までも、ひとつの分野では、その分野に対して発信してきたわけですね。専門誌に論文を書けば、非常に限られた範囲だけれども、論文を書くということで発信ができる。今回のこのテーマは、非常に幅が広い。だから非常に難しかった。非文字資料という言葉も、概念も、捉えるのが非常に難しい。5年間苦労してきた。その成果を、特定の範囲の発信ではなくて、誰が受け取ってくれるかもわからないような多くの人たちにも発信する。

佐野 各班が研究の中で開発したノウハウや研究の成果をどのように整合化し、統合して発信するかについて、議論する機会がなかったのは確かですね。それから情報発信ということでは、地域統合情報発信班では一方向の発信ではなく、たとえば民具作りの画面を見て、疑問点があったら製作者や学芸員などに問い合わせできるような、双方向的なシステム作りを意図しました。将来実現すれば、パソコンの小さな画が無限の広がりを持った博物館になるわけです。中村先生の実験展示班も、見学者に実際に歩いて体感してもらおうとか、展示評価を重視するというので、一方向からの発信ではない形をとられています。

山口 どうもありがとうございました。時間がそろそろ迫ってまいりましたので、言い残したところがあれば、ぜひ、シンポジウムで発展した形で…。

橘川 最初にCOEに応募するときに提出した文書の中に、どのような社会的貢献ができるかという項目が入っていて、その時に、一応学術的なデータを社会の中で生かせるような形で発信すると書いているんですよ。それは、最初から発信ということが要求されていたということになると、従来の研究成果の出し方とは違うことを考えなければならなかった。そのことについて、我々が共通認識を持ってやってきたかという、必ずしもそうではなかった。デジタル技術や情報発信のあり方は、従来の方法と全く変わっているわけだから、それについてどんな可能性が見えてきたか考えていくべきでしょう。それは今後の課題でしょうけれど。

山口 どうもありがとうございました。

(2007年10月19日 於神奈川大学1号館301号室 記録：大西 万知子)

*文章背景の画像は本学大学資料編纂室所蔵資料



第3回 COE国際シンポジウム

「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」

開催日程 2008年2月23日(土)・24日(日) 受付 9:30～10:00 開催場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール

第1日目 2月23日(土)

<総合司会> 西 和夫(神奈川大学教授・COEサブリダー)
10:00～10:05 開会挨拶 中島 三千男(神奈川大学学長)
10:05～10:20 主催者挨拶
福田 アジオ(神奈川大学教授・COE拠点リーダー)

セッション 10:20～11:40

「マルチ言語版『日本常民生活絵引』の編纂刊行」

<コーディネーター> 前田 禎彦(神奈川大学准教授・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・前田 禎彦(神奈川大学准教授・COE事業推進担当者)
「オリジナル版『生活絵引』の編纂とその意義」
・君 康道(東京大学大学院総合文化研究科講師・COE共同研究員)
「マルチ言語版『生活絵引』の編纂とその意義」
<コメンテーター>
・韓 東洙(韓国、漢陽大学校建築学教授)
・クリスティーナ・ラフィン(カナダ、プリティッシュコロンビア大学助教授)

セッション 12:50～14:40

「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」

<コーディネーター> 大里 浩秋(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・富井 正憲(神奈川大学助教・COE共同研究員)
「旧在華企業の居住環境 公大紡績住宅を中心に」
・孫 安石(神奈川大学准教授・COE事業推進担当者)
「漢口日本租界と日本人 菊地洋氏の資料を中心に」
・津田 良樹(神奈川大学助手・COE共同研究員)
「旧満洲国における神社のありよう」
・三鬼 清一郎(元神奈川大学教授・COE共同研究員)「倭城と近世城郭」
<コメンテーター>
・李 百浩(中国、武漢理工大学教授・武漢理工大学土木工と建築学院院長)
・蔡 錦堂(台湾、国立台湾師範大学副教授・台湾史研究所所長)

セッション 14:55～16:55

「インターネット・エコミュージアムの可能性
地域研究と情報学の連携」

<コーディネーター> 佐野 賢治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
<事例報告>
・小野 博(コンテツ(株))
「福島県只見町におけるインターネット・エコミュージアム」
<パネリスト>
・佐野 賢治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
「非文字資料と地域社会
地域統合情報発信システムとしてのインターネット・エコミュージアム」
・木下 宏揚(神奈川大学教授・COE共同研究員)
「地域情報の統合化 民具データを事例にして」
・朽木 量(千葉商科大学准教授)
「地域を博物館にすること 記憶という地域文化資産」
・柴山 守(京都大学教授・京都大学東南アジア研究所副所長)
「地域情報学の創出 ハノイ都市形成研究を事例にして」
<コメンテーター>
・尹 紹亭(中国、雲南大学教授)
「中国文化生態村の構想と実際から」
・任 章赫(韓国、韓国中央大学校副教授、文化財庁文化専門委員)
「韓国民俗村の実績と可能性から」

16:55～17:35 質疑応答 / 17:35～17:40 閉会挨拶

第2日目 2月24日(日)

<総合司会> 田上 繁(神奈川大学教授・COE事務局長)

セッション 10:00～11:30

「身体技法および感性の資料化と体系化」

<コーディネーター> 廣田 律子(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・川田 順造(元神奈川大学教授・COE共同研究員)
「身体技法および感性の体系的資料化へ向けて」
・廣田 律子(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
・海賀 孝明((株)わらび座チーフエンジニア・COE調査研究協力者)
「モーションキャプチャ技術と身体技法」
・渡部 信一(東北大学教授)
「民俗芸能の『わざ』はデジタルで伝わるのか？」
<コメンテーター>
・アルベール・ピアンヴェニュー・アコハ(アフリカ、アボメ=カラヴィ大学教授)
・中村 美奈子(お茶の水女子大学准教授)
・小島 一成(神奈川工科大学准教授)

セッション 13:00～14:10

「身体技法を展示する」

<コーディネーター> 中村 ひろ子(神奈川大学COE教員)
<パネリスト>
・中村 ひろ子(神奈川大学COE教員)
「展示をつくる 研究成果発信装置としての可能性」
・青木 俊也(松戸市立博物館学芸員・神奈川大学COE教員)
「展示をつくる 「あるく 身体記憶」の実験」
<コメンテーター>
・笹原 亮二(国立民族学博物館准教授)
・村井 良子((有)プランニング・ラボ代表取締役)

14:20～15:20 質疑応答

総合討論 15:40～17:40

前半 「国際シンポジウムのまとめ」

<司会> 佐野 賢治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

後半 「COEプログラム全体についてのまとめ」

<司会> 橋川 俊忠(神奈川大学教授・COEサブリダー)

17:40～17:45 閉会挨拶

[プログラムの内容については変更になる場合がございます]

申込方法

参加ご希望の方は以下の必要事項を記載の上、ハガキ・FAX・Eメールにて事前にお申込み下さい。
氏名 住所 電話番号 所属機関
参加希望日
記載された個人情報には注意をもって管理し、シンポジウムの円滑な運営のために活用させていただきます。

申込先

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
神奈川大学COE事務局 FAX:045-491-0659
E-mail: himoji-coe@kanagawa-u.ac.jp
*問合せ TEL:045-481-5661(内線3532)

日本非文字文化研究および保護の実践に関する調査研究

神奈川大学COEプログラムと小澤昔ばなし研究所を例に

西村 真志葉 (北京師範大学文學院 / PD) NISHIMURA Mashiba

最近中国国内で「非物質文化」という言葉をよく耳にするが、これはもともと「無形文化」の中国語訳である。ユネスコで採択された文化財保護制度を背景に、中国国内でも2004年から「非物質文化」に関する政策が現れはじめた。⁽¹⁾「第一次国家級非物質文化遺産」と認定された申請対象は518項目におよび、民間文学(31)、民間音楽(72)、民間舞踏(41)、伝統戯劇(92)、曲芸(46)、雑技と競技(17)、民間美術(51)、伝統手工技術(89)、伝統医薬(9)、民俗(70)などの多領域にわたる。

これからわかるように、中国で「非物質文化」という名で呼ばれる保護対象は、中国民俗学が従来研究対象としてきたものである。中国政府の非物質文化遺産保護制度において、実質的な推進役は文化部を含む九つの政府部門⁽²⁾である。民俗学は文化部直轄の国家非物質文化遺産保護事業専門家委員会の一員として、アドバイザー的な役割を担っているにすぎない。民俗学が最も直接的に関与するのは、各地での非物質文化遺産申請の際においてである。

ユネスコの『無形文化遺産保護条約案』は「文化的活動・財・サービスは、もっぱら商業的価値を持つものとして扱われてはならない」としているが、多くの地域社会は当地の何か「非物質文化」遺産と認定されれば、観光による地域振興を期待する。そればかりではない。2004年から2006年にかけて中国政府が非物質文化遺産保護に投入した経費は年間2000万元にのぼり、2006年には国家級非物質文化遺産目録上の各地に4000万元の経費が

配布された。つまり、「非物質文化」は「非物質文化」となりうる何かを所有している地域社会にとって大切な経済源となる。結果的に、中国政府の非物質文化遺産保護制度は多くの地域社会にあたりまえのものが実は価値あるものであることを認識させたわけだが、地域社会の認識した価値は勿論すぐに国家、民族、人類などの概念と結びつくわけではない。むしろそれはまず資源としての「非物質文化」を生み出す。それは、ユネスコや中国政府が目指す全人類の共同遺産の保護という理念からみればひどく世俗的であるかもしれないが、しかしより切実な地方社会の現実問題を浮かびあがらせる。

そうしたなかで、民俗学は他の学問のようにただ専門家として書面審査に関与するばかりではない。慣例として、民俗学者は事前に現地へ赴き、関係者から申請対象の説明を受け、そしてそれを目にする。それは彼にとって目新しいものかもしれないし、そうでもないかもしれない。しかしそれを取り巻く地方社会の切実な問題と世俗的な応酬は、彼がよく目にするものである。同時に、現地の関係者の説明や申請対象の実演などの背後に、彼はもう一つの見慣れたものを見つけるだろう。それは民俗学という学問と民俗学者の存在である。今日、「非物質文化」遺産を申請する側が民俗学の学問的知識、そして民俗学者を利用することは珍しくはない。彼がただの専門家であれば、申請対象の価値あるいは真偽を判断すればよい。しかし、たとえば民俗学的な資料を手に分こそがある口承伝説の発祥地だと主張しあう二つの村落を

(1) その流れを簡約すると、2004年4月、文化部と財政部が共同で『中国民族民間文化保護工程に関する通知』と『中国民族民間文化保護工程实施方案』を公布し、同年8月末に全国人民代表大会常務委員会でユネスコの『無形文化遺産保護条約案』が採択された。2005年3月には国務院辦公庁より各省、自治区、直轄市人民政府、国務院各部委員会、直結機構に『我が国の非物質文化遺産保護事業の強化に関する意見』と『国家級非物質文化遺産代表作申請評定暫時遂行方法』が通知され、同年6月末に国務院と文化部がそれぞれ『第一次国家級非物質文化遺産目録の通知』と『第一次国家級非物質文化遺産代表作申請に関する通知』を発表した。

(2) つまり文化部、発展改革委、教育部、国家民委、財政部、建設部、旅遊局、宗教局、文物局の九部門。ちなみに有形文化財を主な保護対象をしていた世界文化遺産では文化部、建設部、文物局、発展改革委、財政部、国土資源部、林業部、旅遊局、宗教局の九部門で対策をねっていた。

前にして、民俗学者である彼にはそれは難しいかもしれない。彼は専門家として申請書の制作について相談にのるだろう。そして、研究者として安易な文化批評よりも現象の描写に徹しようと努めるだろう⁽³⁾しかし同時に民俗学者として多くの矛盾に直面するだろう。

若輩者ではあるが、私自身もこのような民俗学者の一人である。私は四年ほどまえから北京市門頭溝区での民俗誌編纂や地方文化財保護目的の調査にたずさわっている。その間、私は地域社会が地域社会自身を生成する過程を描写しようと努力してきたが、結局のところ自分も調査、研究、保護などの形で民俗の再創造に関与しているのではないかという思いが頭を離れなかった。勿論、これは決して私だけの問題ではない。むしろ「非物質文化」を主要対象に学術活動を行ってきた民俗学が、中国政府の非物質文化遺産保護制度に協力する中で突如直面せざるにはいられなくなった一つの問題であり、それを問題視するかどうかは民俗学者と地方民俗愛好家が袂をわかち点だともいえる。近年、学術倫理、主体性をめぐる自省、フォークロリズムという問題が中国民俗学内で討論を巻き起こしているのは、決して偶然ではない。

そんな折に、神奈川大学COEプログラムから日本で調査を行う機会をいただいた。私は『日本非文字文化の研究および保護の実践に関する調査研究』という調査課題を提出し、中村ひろ子先生のご指導の下、具体的な計画を決めていった。私は神奈川大学COEプログラムと小澤俊夫氏の昔ばなし研究所を調査対象に選んだ。それは事前の文献調査で、前者が今後の研究のために資料の収集、分析、整理などを行っているのに対し、後者が今後の伝承のために「本来の形」で伝承を残し、伝承母胎を育成していることを知り、この二つの実践が現代社会における民俗事象の保護という目的をめぐって、民俗学がとりうる二つの対照的な方向を示唆していると考えたからである。そして、現在中国で「非物質文化」とよばれるものと、神奈川大学COEプログラムと昔ばなし研究所が対象とするものは、大差があるわけではない。両機関の実践は、非物質文化遺産保護制度推進に関与すると同時に、その結果引き起こされた討論のただなかにある中国民俗学に、

有意義な経験を啓示してくれるかもしれないと考えたのである。

短い調査ではあったが、神奈川大学COEプログラム支援事務室、COE研究員の土田拓、小野地健両氏から行き届いた手助けをいただいたおかげで、神奈川大学COEプログラム全班と昔ばなし研究所から順調にお話を聞くことができた。民俗学のフィールドワークではいい意味で期待を裏切られるものだが、今回もまたそうだった。

神奈川大学COEプログラムでの聞き取り調査中、一番印象深かったのは、異なる専門と信念を持つ研究者たちの個性が「非文字文化」と「資料の体系化」という枠組みのなかでせめぎあう姿である。これは人文・社会科学が共同研究という体制をとると必然的に生じる問題なのかもしれないが、中国民俗学ではこれほど多領域にわたる研究者が共同作業するということが少なく⁽⁴⁾そうした環境に慣れていた私には衝撃的だった。そして資料の「体系化」を追求する限り、私たちは「非文字文化」を生活的なコンテキストから切り離さなければならず、担い手の主体性は研究者の影に隠れてしまう。しかしこのことは、共同研究という体制をとる神奈川大学COEプログラムでは根本的には問題視されていなかった。民俗学がプログラムを支える唯一の理念ではないのである。

そして昔ばなし研究所の聞き取り調査では、中村と母子氏が「本来の姿」という言葉を繰り返されるのが非常に印象的だった。この元になっているのは伝承にはある種の「原型」が存在するという考え方で、担い手が伝承に行う自由すぎる再構成を、研究者が「逸脱」とみなしてしまい、何らかの「修正」手段を通じて研究者自身が伝承母胎とすりかわるという結果を招きやすくなる。⁽⁵⁾こ



(3)この点に関して中国社会科学院の施愛東が示唆に富んだ論文を書いている。施愛東《学术与生活：分道揚鑣的合作者 以各類“公祭大典”“文化旅游節”為中心的討論》(近日刊行予定)

(4)中国民俗学成立の初期、各方面で活躍する知識人が「民間歌謡」などの口承文芸を全国規模で収集したことがあるが、彼らの多くが文学者あるいは民間文学愛好者であり、特殊な時代背景の下、共通した理念に従って共同作業に徹した。各自が何か特有の専門知識や技術をもちよって作業を行ったわけではない。

れはかつて民俗学が内外から浴びた批判を思い出させる。特に現在パラダイムの転換期にある中国民俗学では、担い手に自由な人としての主体性を取り戻すための理論構築がなされつつあり、「民間社会」と平等な対話関係を築こうという努力が目立つので、⁽⁶⁾この視点から昔ばなし研究所の実践をみると、民俗学と相容れない壁を感じた。

つまり今回の調査では私の当初の目的は果たされなかったわけだが、個人的には多くのことを考えさせられた二週間だった。たとえば前述した民俗学者自身による民俗の再創造という問題もそうである。両機関での聞き取り調査中、これは民俗学者だからこそ頭を悩ませずにはいられない特有の問題であることを私は痛感した。また、神奈川大学COEプログラムでは更に多くの方法論的な示唆を得ることもできた。中国民俗学の現状から見て、第一班の「絵引」作成や第五班の実験展示などは、十分に応用可能な方法である。そしてこのような具体的な方法と同様に啓発的なのは、資料生成の方法論になりうる可能性を秘めた「体系化」という概念である。

私の考えでは、ただそこにあるものがすでに神奈川大学COEプログラムのいう「非文字文化」資料なのではない。それは研究者たちが各自の専門知識と理念を持って「非文字文化」という視点から「体系化」しようと努力す



るなかで「非文字文化」資料となるのである。ここで大切なのは「非文字文化とは何か」という見せかけの命題ではなく、いかに「非文字文化」資料を創りだすか、又は創りだすことが可能かという方法論である。個性豊かな研究者たちが主張し合うことで、神奈川大学COEプログラムの目指す「体系化」は、単なる形式上の目標から一種の資料生成の方法論になりうる力強さをもっているように見受けられた。

今回の調査で得られた問題意識と方法論上の示唆を、今後、中国民俗学内での討論に生かしてゆきたいと考えている。

(西村真志葉さんは、2007年7月25日～8月7日まで、訪問研究員として来日された。11ページから21ページの挿絵は西村さんの手によるものである。)

(5) マックス・リュティの様式理論に詳しい小澤俊夫氏は反対されるかもしれない。「本来の姿」というのは「原型」ではなく「目標形式」で、「修正」を行うのは研究者ではなく生きた昔話を持つ「自己修正」能力なのだ。しかし民俗学の観点だけから見れば、文学者としてのリュティの考えはやはりこの点で説得力に欠けるように思われる。

(6) この方面に力を注いでいるのが中国社会科学院の呂微、戸曉輝両氏であり、「民間文学 民俗学の意向方式」(《民間文学 民俗学的意向方式 訪中国社会科学院文学研究所民間文学研究室主任呂微研究員》、《中国社会科学院院報》2006年11月9日)は呂微氏の基本的な考えを最もよく反映した談話録である。また戸曉輝氏の集大成ともいえる『純粹民間文学』は近年出版予定である。

Voices of Young Scholars 2

武士道をめぐる私の2週間

ベネシュ・オレグ (ブリティッシュコロンビア大学アジア研究専攻博士課程) BENESCH Oleg

神 奈川大学COEプログラムに招かれた2週間の滞在の間に、ブリティッシュコロンビア大学アジア研究の博士論文のための研究がかなり進展した。訪日前には、日本のネット上のデータベースを利用して東京近辺の図書館、博物館、古本屋などの情報を調べていた。私

の研究は1895年～1945年の間の武士道というイデオロギーの発展の検討であり、2種類の資料に焦点を当てている。1つ目は当時の1次資料であり、2つ目はもっと新しい20世紀前半の政治、教育、社会の歴史についての2次資料である。

COE訪問初日の橘川先生との有意義な面談では、先生が私の研究テーマに対していくつかの新しい視点を提案してくれた。例えば、講談での武士道と侍のイメージの扱いで、丸山真男と福沢諭吉の本を下さった。2日目からの東京近辺での個人研究は、神保町の古本屋から始めた。数日の間に、明治・大正・昭和時代の武士道・精神教育に関する19冊の本を購入することができた。比較的新しく重要な2次資料になり得る何冊かの古本も見つけた。ネット上で既に見つけていた本もあったが、購入した資料のほとんどは書店に積まれた本の中から探し出したものである。その雑多な本の山の中からは、聞いたことのない本もいくつか現れ、研究に対する視野が広がり、視点が定まった。その結果、「ポスト・サムライ時代」の武士道・近代初期の教育、武士のシンボルや倫理の美化についての最新文献をたくさん見つけることができた。近年、日本では武士道への関心が再燃しているということは既に知っていたが、現在出版されている学問文献の多さに驚いた。国際日本文化研究センターの笠谷和比古をはじめとする、この分野の最先端の研究者の本もいくつか購入した。

両国にある江戸東京博物館の図書室でも大きな収穫があった。常設展示室にも行く予定だったが、結局全ての時間を図書室で過ごした。図書室には驚く程幅広く使用できる資料があり、他の図書館で見つけられなかった価値ある論文を、この図書館のデータベースで見つけることができ、後に神奈川大学図書館でその論文を読むことができた。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館も訪問した。閲覧室の資料は、来日する前に読んだ何冊かの本で引用されていたため、戦前の舞台や映画におけるサムライのテーマとイメージに絞って情報を探し、1932年に書かれた武士道についての6本の手書きの脚本をはじめ、いくつかの有用な資料を見つけることができた。この資料のおもしろいところは、作者が山岡鉄舟(1836~1888)を武士道の最初で最も重要な解釈者とみなしていることだ。初めて題名に「武士道」という言葉を冠した本の作者として、山岡が武士道のイデオロギー・進展に果たした役割は大きかったように思われるにもかかわらず、今まで私が調べた資料では、そのような認識は見受けられなかった。特に最近では山岡はすっかり影が薄くなり、新渡戸稲造の名前が武士道の類語になったといえるほど有名になっている。

また国立国会図書館所蔵の洋書の多さにも興味をそそられた。その中には北米ではなかなか見つからないものもあり、カナダで見つけられなかったいくつかの英語とドイツ語の資料も調べることができた。これらの洋書にはあまり革新的な解釈はなかったが、日本以外の国では、武士道の進展を扱う研究に関して、まだ不十分だということを確認できた点において、私にとって意義があった。

国会図書館で見つけたもう一つの有用な資料は、1947年から現在に至るまでの国会の議事録だった。全文検索ができるため、比較的簡単に戦後に至るまでの日本の政治家の武士道への関心について位置づけることができた。議事録中に160件以上の武士道関連の記録を見つけたが、面白いことにその過半数はここ10年のものであり、現代日本における武士道の再燃が明らかに見て取れる。教育基本法についての最近の討論の中で、多くの武士道への言及を見つけれられたのも有益だった。首相と文部大臣を含め多くの議員が、日本の戦後教育に欠けているとされる「道徳教育」の例として、武士道にしばしば言及していた。この情報は現在の日本における武士道への関心度と高い評価を明らかに示しているため、かなり感心した。

橘川先生のご指導とこれらの機関での研究を行う間に得られた理解を通して、様々な分野の武士道に関係した本を50冊以上と、いろいろなコピー資料を収集することができた。日本滞在中は分析や評価より資料の収集を優先していたが、プリティッシュコロンビア大学に帰ってからは、収集した資料を分析し、博士論文を書き進めている。これはまた、6月に私が中国の学会で発表する論文の基盤にもなった。今回、収集した資料の数が多すぎて、徹底的に分析するにはあと何ヶ月もかかりそうだが、博士論文と中国で発表する予定の論文の他にも、来年カナダや外国で発表する論文の基盤にしたいとも思っている。

この貴重な機会は、研究に役立っただけでなく、個人的にも良い経験になった。以前、4年間日本に住んで麗澤大学で修士号をとり2004年に帰国した後、今回は久しぶりの日本滞在中だったが、COEプログラムの皆さんの歓迎と指導は予想以上に素晴らしく、とてもくつろいだ気分になれた。なんとか、近いうちに日本へ来る機会を作って、神奈川大学での滞在中に知り合った人たちと再会したいと思っている。

(BENESCH Olegさんは、2006年11月21日~12月4日まで、訪問研究員として来日された。)

*本稿は英語で提出されたものをサイモン・ジョン(2005年度COE調査研究協力者)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。

大学生の環境認識 自然地理学の講義現場から

藤永 豪（佐賀大学文化教育学部講師 / 元PD）FUJINAGA Go

「田んぼが人工的につくられたことにおどろきました」。

私は地理学を専門とし、これまでいくつかの大学で、地理教育に携わってきた。冒頭の文章は、東京の某女子大学で自然地理学の講義を行った際のある学生の感想文である。この授業では、地形や気候、植生、土壌、水など、自然地理学における基礎的な学習内容とあわせて、「里地・里山」、「雑木林」、「水田の多面的機能」、「環境保全」といったキーワードをもとに、身近な自然環境についても解説してきた。これは、私が農山村に暮らす人々の生活と自然環境との関わり、すなわち生活の舞台としての自然環境の上で、われわれ人間がこれとどのように係わり合い、自らの生活空間をどのように展開してきたのか、ということに研究の主眼をおいてきたことと関係する。

周知のように、里地・里山には宅地を中心に耕作地、雑木林等が配置され、宅地は人々の定住する場として重要な空間であり、寺社等の人々の精神的なよりどころとなる場所も存在する。耕作地は生産活動の場として、農業が営まれ食料を供給する。雑木林からは燃料となる薪材が採集され、木炭の生産の場ともなる。加えて、落ち葉は秋に集められ、糞や自宅で飼育されている牛馬の糞と混ぜられ、発酵させ、翌春には耕作地に鋤き込まれる。地域によっては用水路の底に溜まった植物等の残渣も水中の微生物が分解し、肥料として水田に揚げられる。また、木の実や山菜の採集やイノシシ、野ウサギなどの狩猟が行われる。これは、住民による枝打ちや間伐、下草刈りといった資源としての雑木林の管理の上に成り立つものである。しかも水田にはメダカやドジョウ、ナマズなどの魚類やタガメやミズカマキリ、アメンボなどの水生昆虫、カエルやイモリなどの両生類が生息し、食物連鎖の中で先ほどのイノシシや野ウサギの生息を支えている。さらには人間が意図しないところでも、ミズニラやデンジソウ、オニバスといった現在では絶滅が危惧される植物の生育の場となり、生物の多様性を生み出している。このような形で、人間や生物、その他の有機物・

無機物が互いに結びつきあい、循環し、里地・里山を形作っている。

このシステムは人間が自然環境に働きかけた結果であり、決して何もないところから自然にまかせたままの状態が発生したものではない。しかしながら、先ほどのような、水田がそれこそ太古の昔から今の形態のまま自然に存在してきたと信じ込んでいる学生がいる。田んぼ1枚を切り拓くために、人間がその場所についての水や日照等、自然条件を観察し、どのような判断のもとにどのような技術をもってその土地に挑んだのか、そういった人と自然との格闘や対話にまで考えが広がらないのである。そもそも農業という生産活動を理解していないともいえる。極端に言えば、人間以外の動植物やそれらが生息する空間はすべて天然自然であり、人間とは直接関係するものではないと思込んでいるのである。

「たくさんの森や林が人工的なものだと思って、すごく驚きました。そして、それを管理している人がいるというのも、ビックリしました」このような感想も相次いだ。これは森林の成り立ちと人との関わりについて、植生遷移と人工林を例に話をした際の感想である。山々を覆うスギやヒノキが人間によって植えられたこと、そして、枝打ちや間伐などの作業を行わなければ荒廃し、倒木や土砂流出を引き起こし、洪水とあいまって、ふもとの町に甚大な被害を与えることを知って驚く。そんな反応の裏側には、彼女らにとっての「こんな山奥」に人が住みつき、生活をしていることの不思議さとその営みのあり方によって災害が引き起こされ、その影響が、彼女らが便利で万能であると信じ込んでいる都市生活の日常を脅かすことへの怖さがある。

こういった現象は、われわれ研究者にとっては周知の事実であり、これらを研究対象として、そこからさらに何かを見だし、自然環境と人間との関係を考えていかなければならないものである。しかし、すべてとはいわれないが、学生の中にはこれまで述べたような形で自然環境を認識している者が少なからず存在する。自然環境vs人間という二項対立的な考えをすべてに当てはめ、人間

の居住域にクマやイノシシ、スズメバチが現れるとおののくのである。「閑静な住宅街に謎の生物が！」といったようなテロップを画面に流し、やたら騒ぎまくる夕方のニュース番組を見ていればよく理解できる。もちろん、良心的な番組も存在する。だが、中には前述の自然環境 vs 人間という観点からのみ現象を伝え、逆に野生動物たちのテリトリーに、われわれ人間が踏み込んでいった結果であるという相対的事実が欠落しているものも多くみられる。もともと自然環境との接触が少ない都市で育ってきた若者だけでなく、農山村に住む者たちまでがそういった情報に感化され、自然環境に対する認識の形成に影響を受ける場合もある。実際、学生がこのような番組を見て私に質問をぶつけてくることも多々ある。

先ほどの食料という点でも同様のことがいえる。学生たちはファミリーレストランやファーストフード店で食事をしながら、あるいはスーパーやコンビニエンスストアで買い物をしながら、目の前の食べ物が自分たちの口に入るまでの流れやそこに携わる人々のことを考えたことがあるだろうか。動植物は加工され、原型をとどめない「商品」としてテーブルにあがってくる。その過程は一切見えず、人と自然のつながりを感じることはなく、そこで育まれた民俗や文化を知ることは一切ない。たとえば、ある動物を捕獲するために人間はその生態を観察し、罠を仕掛けるために知恵を絞る。そこには野生と人間との知恵比べが、ローカルな民俗的な科学とでもいうべき知識や技術として現れる。さらに、その動物を捕らえることができたことを海や山の神に感謝し、その肉を喰らい生命をつなぐ。やがて、こうした自然に対する感謝と畏敬の念が生活の中で生まれた時、精神的な文化が醸成されることになる。もっとも、現在では食料の生産・流通システム自体が大きく変化し、自給率の低下や、残留農薬、BSE問題など、食そのものの根幹が揺らいでいるのだが。

このほかにも、山に棲む動物たちに関して解説していたところ、民話の話になり、絶滅したニホンオオカミに言及したことがあった。すると「オオカミが絶滅したことを聞いて、初めて実際の動物だと知りました。伝説の動物だと思っていました」という感想文が出てきた。これについても彼女たちが育ってきた環境を考えれば無理もないことである。彼女らにとってニホンオオカミに出会えるのは、「おはなし」の中だけである。野ウサギやイノシシなど、現在でも山に生息する野生動物さえ見たことがない。日常生活の中で目にするのは、むしろ、以前

は決して見ることの出来なかった海外の珍しいペット動物だったりする。それでも、山で長年暮らしてきた古老に話を伺うと、とたんにニホンオオカミは語り部によって生命を吹き込まれ、いきいきと動き出すことになるのだが、彼女らがその古老に会う機会はまずない。

なにやら、非文字資料研究とはかけ離れたような内容になってしまったが、私がここで考えていることは、こうした現代の学生の環境に対する意識や認識に関して、本COEプログラムの研究成果が活かされないか、ということである。本COEプログラムの主要な研究テーマの一つとして、「環境と景観の資料化と体系化」が掲げられ、人々の環境に対する認識とその変化の解明が目的として据えられている。学術的な追求がCOEの中心軸であることは重々承知しているのだが、プログラム終了後のさらなる発展ということ考えた時（たためない大風呂敷を広げてみようがないが）その成果の還元先として、教育という現場を視野に入れてもよいのではないだろうか。今年度で本COEプログラムは終了する。しかし、それで非文字資料研究のシャッターが下ろされるわけではない。さらなる研究の発展と幅広い領域への成果の還元・活用が求められることになる。

文字に表現されてこなかった非文字という人類文化の継承を考えた際、その成果を研究者だけの経験として蓄積するのではなく、次世代の文化を担い培う若い学生たちへの継承を図ることも重大な使命の一つとなろう。確かに、研究そのものの継続や博物館専門職員等の育成はこれまで述べてきた問題をある程度カバーしてくれるであろう。しかし、私の個人的な望みでしかないかもしれないが、教育という現場を借りてあるいは利用することで、もっと本質的なところでの貢献が可能となるのではないか。

大学生を例に話を進めてきたが、われわれ現代人の頭の中で乖離してしまった自然環境と人間との関係、そしてその認識をどう修復し、つなげていくのか。これは人類(文化)にとって大きな課題であり、決して本COEプログラムと無縁ではない。

ある時、里地・里山に棲む生き物たちの話をしたところ、感想文に「おたまじゃくしってかえるになる途中、足がはえるって何かきもくないですか？」というものがあった。そして、その後に「でも、自然っていいですよな」という言葉が続く。さて、これをどう考えるべきか。本COEプログラムはこの問いに対する答えを導き出す可能性を秘めている。

煙突のなかの手紙

土田 拓 (COE研究員・RA) TSUCHIDA Taku

「まるで御殿のようにみえた」と周りの戦後開拓農家から形容された家がある。洋風の外観を持つその家は、北海道オホーツク海沿岸部に位置する、ある集落の農場主の母屋として1927年に建てられた。戦後になってから住人の交替が2度ほどあり、現主人は1967年頃に引き継いでいる。そうして80年近くの齢を重ねた家で、私が写真の手紙を見せて頂いたのは、2005年の冬のことだった。家の2階、ベチカの煙突のなかから出てきたというその手紙は、今の主人(1924年生まれ)が掃除の最中に見つけたものである。

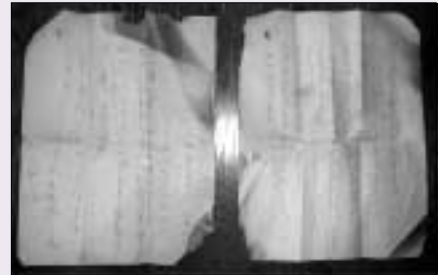
2枚のkokyōの便箋上に、平仮名を中心とした大きさの不ぞろいな文字が並ぶ。あるところの句読点は省略され、またあるところではその位置が左右逆になっていたりする。打ち消し線をともなって余白部分に連なる、判読の難しい数語は、漢字の練習でもしたのであろうか。

焼却されるはずだった下書きを想像させるそのつたない文面は、仕事の斡旋を知人へ依頼している。どうやら、朝4時から夜7時までの「北海道のごと」が大変なため、東京で仕事につきたいということらしい。文章をしたためた時点での差出人の仕事について具体的に表現されてはいないのだが、農場を経営していた家から発見された手紙であることに思いを巡らせば、家人ではない彼は雇い人として農作業に従事していた可能性が高いだろう。差出人である「彼」のこの家での立場や性別は、文中の「ぼく」という一人称や、農場主とは異なる苗字などからの推測である。

今、聞き書きするなかで触れることのできる、この地域に関しての人々の記憶のなかに彼の名は出てこない。彼はどこで生まれ、どんな家庭に育ったのだろう。どのような性格で、いかほどの身長や体格の持ち主であったか。どういった経緯でこの家へやってきて、どれくらいの期間をそれから過ごし、その間なにを考えただろう。

それらの問いかけに答えてくれるものは見当たらない。ただ手紙の存在のみが、かつて彼がいたことのよりどころとしてあり、そうした形で、明治以降に拓かれた開拓地における人々の流動性の一端が現在に顔をのぞかせる。

写真1



【凡例】

- 1) は判読不明
- 2) 括弧内は筆者による補足
- 3) 人名は英字で表記
- 4) 打消し線は原文のまま
- 5) 句読点の位置は通常的位置に訂正

「体はもたない」というほどに彼が感じた仕事量は、彼一人に限ってのことではなかった。手紙を見つけた現主人は、それくらいの仕事は当たり前だったという。冬に材木の伐出し等の山仕事に携わっていた別の男性(1915年生まれ)は、「なに俺なんかもう過労死してもんあるんだったら、10ぺんも死んでるわい」と語る。この地に住み続けてきた人々と、この地を離れていったであろう彼の境目はどこにあったのだろうか。

建てられた当時、御殿のようにみえた洋風の屋敷は、自家菜園畑や牧草地をその周りに抱えながら、今も生活の場となっている。幾度かの住人の交替を経験しつつ、屋敷とその周りの生産領域に依拠した暮らしの立て方自体は引き継がれてきたことになる。その生活の積み重ねのうちには、彼のような流動的な人々による営みも溶け込んでいるのであった。

開拓地における暮らしの様式が形成され、継承されてゆく背後にあった、人々の動きの大きさあるいは逆に、人々の流動性をまたがる形での開拓地における生活の継承性といった問題を、煙突のなかから出てきた手紙は投げかけている。

図像学研究の課題

佐々木 弘美 (COE研究員・RA) SASAKI Hiromi

歴史学における絵画資料研究は、ここ数十年の間に多くの成果を挙げてきたが、現在ひとつの限界に突き当たっている。美術史家は鑑賞者の視点への回帰によって、この壁を打破しようとしているが、それだけでは絵画資料研究の壁を乗り越えることはできない。作者の内側から溢れ出る身体表現の痕跡である筆跡の意味を、十分に理解できなかったことが、これまでの図像学研究の限界になっていたからである。画家と歴史学者両方の視点を併せ持つ研究者がいなければ、いくら絵画資料を利用して、作者の意図を読み解くことはできないだろう。

また画家も、歴史学における図像学研究を積極的に論じたことはなく、ただ歴史学者の求めに応じて復元作業に関わってきただけである。たしかに、歴史に対する知識が皆無に等しい画家による解釈には、時代背景を無視したものが多く、歴史学者の参考にはならなかった。しかし、筆跡から制作過程を再現できる画家が解釈に参加しなかったことは、図像学研究にとって大きな不幸である。制作過程を正確に復元できず、作者の意図を知ることができないからだ。たとえ多くの情報があっても、気づく者がいなければ議論は豊かにならない。

現在の画家は、作者の身体表現の痕跡である筆跡から制作技法を再現できるため、過去と現在という時間的な隔たりがあったとしても、共感することができる。さらに作者は鑑賞者の視点を意識しながら制作したのであり、作者の制作意図を再現できれば、当時の鑑賞者の視点を復元することもできる。

もちろん現在の画家は、身体技法を復元できても作者本人ではない。そのため、画家の視点とはいっても、作者の視点と異なるという指摘もあるだろう。しかし、そのような指摘は重要なことを見落としている。現在の画家は作者本人ではないが、痕跡である筆跡から作者の身体表現としての技法を再現することができる。そのことで、画家は作者との間に主観性を築くことのできる画家集団の一員である。これが、画家と歴史学者の違いである。

さらに作者の視点を重視するとはいっても、鑑賞者の視点を否定するものでもない。作者は自らの意図を正確

に鑑賞者に伝えることを目指して試行錯誤するのであり、作者の意図と鑑賞者の視点は決して対立するものではないからだ。それぞれの時代にそれぞれの形式があるのも、鑑賞者に自らの意図を正確に伝えるためであり、形式と内容は決して対立するものではない。形式と内容が対立するのは、形式で表される内容を重視すべきところを、形式にとらわれるようになったときである。

当時の画家の意図を復元する上で最も重要なのは、絵画の構図である。絵画資料の構図は文字資料の物語性に相当し、画面に描かれている一つひとつの図像は、物語性である構図によって大きく意味を変える。絵画を効果的に見せるのが構図であり、そこに作者の意図だけではなく力量までも見ることができる。このような構図を理解できれば、作者の心性を復元できよう。しかも作者が鑑賞者を意識していることを知れば、そこから当時の鑑賞者の視点を回復できる。

わたしは、鎌倉期の浄土教系高僧伝絵巻『一遍聖絵』や織豊期の合戦図屏風『朝鮮軍陣図屏風』を具体例に取り上げて、鑑賞者に見られることを意識して描く作者の視点を、構図から再現した。これは、『絵巻物による日本常民生活絵引』に見られるような記号的解釈を乗り越える試みである。

絵画資料によって明らかになる歴史は、文字資料によって明らかになる歴史とは異なる。絵画は、観察したものを自分の中で消化して表現したものであり、写実的に描いたものも心象的形象といえる。そのため、絵画資料は描かれた時代の人びとの心象を表象した歴史的資料といえる。そのような意味で、絵画資料と文字資料は同等の価値を持つ歴史資料といえる。

さらに科学的方法の導入によって、当時の人びとが見たものを再現できる。歴史学者のなかには科学的方法に対して懐疑的な者も多いが、復元作業によって、当時の鑑賞者と現在の鑑賞者の視点は重ね合わされる。画家の参加と科学的方法の導入で、当時の作者の意図と鑑賞者の視点が復元され、過去と現在の間に主観性を築くこともできよう。

『旅行雑誌 (China Traveler)』について

王 京 (COE研究員・PD) WANG Jing

2006年の夏に筆者は本プログラムの派遣で上海・華東師範大学を訪れ、2週間の資料調査を行った。

同大学は、大夏大学(1924~1951)と光華大学(1925~1951)を主体に、復旦大学の教育学部、同済大学の動物学部、植物学部および東亜体育専科学校を吸収して1951年に創立されたものである。その後、1950年代に相次いで聖約翰大学、浙江大学、滬江大学、暨南大学、大同大学、震旦大学、江蘇師範学院、上海師範学院から教育、中文、音楽、地理、物理、化学、生物、社会、数学などの学部を吸収し、関連する蔵書を各大学から受け継いでいる。現在、当大学は1949年以前の中国語雑誌だけでも2205種を所蔵している(『華東師範大学中国語雑誌目録(1886~1949)』1986年)。この豊富な資料によって今回の調査は多くの収穫を得たが、ここでは『旅行雑誌 (China Traveler)』について紹介したい。

周知のように、今の中国は空前の旅行ブームの只中にある。21回目の「黄金週」大型連休を迎えた、さる10月1日~7日だけでも、昨年度同期より9.6%増の延べ1.46億人が旅行に出かけ、売上額は1兆円に近いという(10月8日、政府関係部門の記者会見)。一方、中国初の旅行ブームは1920、30年代であり、中国旅行社の活躍はそれを大きく支えていた。

1923年に創設された上海商業儲蓄銀行旅行部が1927年夏に中国旅行社として銀行から独立し、中国初の近代的な旅行会社が誕生した。先だって同年春に創刊された旅行部の『旅行雑誌』(写真1)が同社の機関誌となり、1928年までは季刊、それ以降は

月刊として発行された。『旅行雑誌』は国内外旅行の紀行文、旅行業関連論説、中国旅行社の近況や旅行常識、観光地紹介、交通宿泊事情、時刻料金表から美術、撮影、小説に至るまで多彩な内容を持ち、初期の中国旅行産業研究の基本文献であると同時に、同時代の社会文化研究にも貴重な資料を提供している。同誌の内容の中で筆者が目にするのは、主として以下の2つである。

一つは日本関係の記事である。創刊号の「本年の日本花見旅行団」はその第一弾であった。12人1組で4月1日から15日にかけて長崎、京都、東京、日光、大阪、宮島、別府などを遊覧するツアーの募集で、詳細な日程表も載せられている。同記事では前年1926年に組織された初回花見旅行団のものとして、2枚の写真を掲載しているが、その1枚は澁澤榮一の邸宅におけるもので、写真前列中央の老紳士は澁澤であった(写真2)。

花見と澁澤とは一見妙な組合せのようであるが、中国初期の旅行業と金融業との密接な関係を考えれば不思議ではない。王伯元、張頌周、譚海秋などの面々も見られる花見旅行団の目的は、決して単なる観光ではなく、日本の金融界・実業界との交流も図られていた。澁澤の行動予定表である「集会日時通知表」同年4月17日(土)の項ではこの旅行団について「中華民國上海実業家廿余人」(『澁澤榮一伝記資料別巻第二』p.668)と記している。

その後も日本旅行の記事は時局の影響を受けながらも度々見られ、1937年5~8号に連載された余大雄の「東茗小品」を最後に誌面から姿を消した(表1)。これらの記事を分析し、日中戦争までの約10年間における中日交流の在り方の変化、中国人の日本認識の変化などを検討することが可能であろう。

表1: 『旅行雑誌』日本旅行関連記事年別回数表

年	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
回	3	6	2	4	9	1	0	3	4	4	6

もう一つは民俗・民族学関係の記事である。『旅行雑誌』において、1928年までの国内旅行記事は専ら名勝地に集中していたが、1929年からその範囲が広がり、特に

写真1



『旅行雑誌』創刊号(1927年春)表紙

辺境地域に対する関心が高まっており、例えば程志政訳「西藏の一瞥」(3-6) 趙君豪「東北履痕記」(3-8~12、4-2) 伯時「滇黔苗話」(4-8)など、辺地の民族や風俗などを主題とした文章も多くなってきた。

これは北伐の結果として、1928年12月に南京国民政府によって、形式的ではあるものの、辛亥革命以来の全国統一が実現されたことと関連する。これまで無関心だった国内の僻地を、統一されるべき「辺境」、その住民を「団結」すべき「自民族」の一部として強く意識するようになったことは、上海を代表するグラビア総合誌『良友』画報の同時期の旅行関連記事にも確認できる(拙文「『良友』の旅行関連記事 1920~40年代の旅行と近代国家」『アジア遊学』103号、2007年9月を参照)

日中戦争勃発後も、『旅行雑誌』は上海で発行され続けた。1938年11月、観光地を中心としながら初めての地域特集「西南専号」(12-11)を編纂し、やがて黄炎「西康調査日誌」(1939年5~7号連載)のような本格的な調査報告も登場するようになった。

1942年8月、桂林において旅行社直轄の出版機関が創設され、12月まで同時に上海版と桂林版が発行されていた。編集部が桂林に移った17-1(1943年1月)以降、誌面では熟練した研究者による西南、西北地域に関する学術的考察が主流となり、民俗・民族学雑誌の様相を呈し

写真2



1926年日本花見旅行団(『旅行雑誌』創刊号 16ページ)

ていた。これらの文章から、当時、民俗学・民族学の課題及び研究手法を分析し、戦時中同誌が持った意味を学史において位置づけることが今後の課題である。

なお、編集部は18-6(1944年7月)より重慶に移動し、1946年に上海に戻ったが、雑誌は1949年まで中断することなく発行されていた。以降、同名雑誌は台湾(雑誌の創始者によって1950年3月まで)と大陸(接收された雑誌社によって1955年まで、以降『旅行家』と改名)でそれぞれ刊行されていた。

華東師範大学の所蔵は1945年初ままでであるが、中国国家図書館、京都大学人文科学研究所、国際日本文化研究センターなどの所蔵と比べ、戦時下の激動期である1937年以降も欠号が少ない点は貴重であると言える。

Voices of Young Scholars 7

浮世の麗しい影 浮世絵の美人絵略論

衣 曉龍(華東師範大学中国民俗保護開発研究中心博士生) Yi Xiaolong

2007年7~8月の間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招きで、日本で浮世絵芸術を研究する機会を得た。二週間という短い期間ではあったが、拠点リーダーの福田アジオ教授や指導教員の田上繁教授をはじめとするCOEの方々のお陰で、充実した研修生活を送ることが出来た。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたい

と思っている。

浮世絵は流派や分類が多いため、その内容も複雑で入りくんでいる。本文は浮世絵芸術の中で、最も重要である「美人画」から出発し、浮世絵芸術について簡単に述べたいと思う。

「浮世」という言葉は元来仏教用語である。日本では、

15世紀以降「塵世」、または「俗世」という意味で使われ、16世紀以降は、妓楼や歌舞伎など享楽にふける場所を指すことにもなった。浮世絵の題材として最もよく使われているのは仕女画であり、「美人画」と称される。なかでも妓楼で働く女たちの姿を描いたものは、江戸時代の派手な社会の気風の描写であるといえる。

浮世絵は庶民の生活を描写する風俗画でもあり、江戸時代には早くも当時の世俗画業界の中心になっていた。18世紀後期、浮世絵画家の作品が大量に広まって、美人画は隆盛期をむかえた。浮世絵の構図、独特な人物造形、鮮やかな色彩で形成された強烈な対比、及び主題内容などに日本画の特色が溢れており、中国画及び西洋画と顕著な違いをもっている。

初期の美人画は日本の貴族文化の一部ともいえよう。その題材は、仏教に関するもの以外は主に上層社会の貴婦人たちの生活を描いた。その後、武士階級の地位の上昇につれ、女性の家庭内の地位も貴族時代より高くなり、美人画の内容もだんだん武士階級の文化の一部に拡大した。江戸時代以降、美人画が繁栄期に入り、その題材も大きく変わった。美人のモデルが多く歌舞伎役者などになり、美人画はますます世俗的な様相を呈するようになっていった。そして19世紀半ばに浮世絵美人画の発展は終焉を迎えた。

浮世絵美人画が世俗的で淫靡な表現にまで向かったのは、日本の伝統的な幽玄で婉曲な審美主義とはまったく

相容れないように思われる。しかし、よく考えてみるとこのことはそう理解しがたいものではない。

まず、日本人が古くから性に対して、開放的な態度をもって来たこと。この点は日本人のうわべの印象とは一致しないように思われる恐れがあるが、今日に至るまで依然として繁栄する日本のポルノ文化からみても、日本の性に対する態度は比較的開放的であることがわかる。日本文化の性格は「菊」と「刀」の複雑な合体である。

次は、浮世絵美人画が盛んになった時代背景との関係である。江戸時代は、貴族、武士の地位が低くなり、新興の商人階層が急速に増大した。商人文化は貴族文化や武士文化とは完全に異なるものであり、より享乐的な傾向が強い。この現世の楽しみに対する愛着と追求が、美しく露骨な美人を描く浮世絵芸術に反映された。しかし、このような転換が浮世絵芸術を墮落させたのか、それともそれを新しい境界まで推し進めたのか、意見はまちまちである。

私が思うに、われわれはポルノ芸術に適切な地位を与えるべきである。今日の芸術道徳観では、いかなる芸術形式をもみだりに否定してはならない。まして浮世絵芸術はかつて一時代を築き、日本、ひいては西洋の絵画芸術に巨大な影響を及ぼしたのだから。

(衣曉龍さんは2007年7月26日～8月8日まで、訪問研究員として来日された。)

*本稿は中国語で提出されたものを劉湯水(RA)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で一部手を加えたものである。

Voices of Young Scholars 8

香港における日本のテレビドラマ

王 志垣 (香港大学日本ドラマ専攻修士生 / RA研究員) WONG Chi Hang

1970年に放映された「サインはV」(TBS、1969年)から、日本の連続ドラマは香港人の心の中で重要な位置を占め、香港人全体の記憶の中の欠かせない一部分になった。「魔の变化球サーブ」でバレーボールが好きになったり、おしんの不運に毎晩涙をこぼしたり、ガラスのりんごを愛の証としたりする者が続出するほどであった。しかし、このように30年来、香港人が幾度も感動

してきた日本ドラマは、21世紀になってからやや勢いが衰えてきたようだ。「HERO」(フジテレビ、2001年)と「白い巨塔」(同、2003年)を除き、深い印象を残したドラマはほとんどなく、全盛期とは雲泥の差がある。2005年に放映された韓国の「大長今(邦題:宮廷女官チャングムの誓い)」が多大人気を集め、以降、各局は競って韓国ドラマを放映し、香港で「韓流ブーム」を呼び起こ

し、日本に対する注目度はさらに下がる結果となった。日本ドラマはこれまでの勢いを取り戻せないまま、韓国ドラマに取って代わられることになるのだろうか。

香港人が初めて日本の連続ドラマを見たのは、「麗的映声」(Rediffusion Television, RTV) がシェアを独占していた1960年代に遡ることができる。1967年3月、日本の連続テレビ時代劇「武士道」(1962年)がRTVで放映され、これは香港人にとって初めての日本ドラマであった。しかし実際はそれ以前に、RTVの英語チャンネルでは既に同ドラマの英語版が放映されていた。なぜ英語版なのかというと、このドラマの放映権を取得したオーストラリアのテレビ局が英語吹替版を制作して放映し、大いに人気を博したことがあり、それを知ったRTVはオーストラリアのテレビ局からこの英語版を購入し、放映したのである。1967年になると、広東語の吹替え版がお目見えしたことで、初めて一般の香港人が日本ドラマを体験することができたといえよう。

1967年11月、「無線電視」(Television Broadcast Company, TVB) が開設され、RTVの独占を打破し、香港テレビ界に活力と発展をもたらした。TVBは地域、ジャンル、視聴ターゲットが異なる数多くの番組を導入し、視聴者に豊かな選択肢を提供しただけではなく、1970年代香港における「日本ドラマブーム」の生みの親でもあった。「サインはV」、「柔道一直線」(TBS、1969年)「おくさまは18歳」(同、1970年)「おれは男だ」(日本テレビ、1971年)「木枯らし紋次郎」(フジテレビ、1972年)「俺たちの旅」(日本テレビ、1975年)と「Gメン'75」(TBS、1975年)などの連ドラがTVBで放映され、熱烈な歓迎を受け、香港における日本ドラマの地歩を固めた。このときの「日本ドラマブーム」は長く続かなかったが、これらのドラマによって日本文化は次第に香港人の生活に浸透し始めた。1970年代以降、テレビ各局は自作番組の製作に力を入れ、香港ドラマは質的にも量的にも大幅に向上し、黄金時代を迎えた。それに伴い、日本ドラマの重要性が徐々に弱くなり、番組表から姿を消していった。1980年代には、他局ゴールデンタイムドラマの対抗馬としてTVBで放映された「おしん」(NHK、1983年)のように人気を得たドラマもあるが、それもほとんど単発的なものでしかなく、全体として日本ドラマは影をひそめた時期だったといえる。

1990年代になると、日本ドラマは時代の息吹を感じさせる新しいスタイルで登場し、再び各局の注目を浴びる



ようになった。1990年代初め、やや立場の弱い「亜洲電視」(Asia Television)は、自作ドラマの視聴率とTVBとの差が拡大していく中で、日本ドラマに目を転じ、共存続の希望を託した。「東京ラブストーリー」(フジテレビ、1991年)や「家なき子」(日本テレビ、1994年)などが大ヒットし、人々が日本ドラマに対して新たな関心を持つようになった。遅れをとるまいと、TVBも「ひとつ屋根の下」(フジテレビ、1993年)「金田一少年の事件簿」(日本テレビ、1995年)などの人気ドラマを放映し、1990年代半ばの海賊版日本ドラマを見る風潮に間接的に影響を及ぼした。開局したばかりの「有線電視」(Cable TV)もこの流れにのって、所有する女性チャンネル、若者チャンネルで大量の日本ドラマを放映し、視聴者の獲得に躍起になった。

21世紀に入ってから、日本ドラマは再び勢いを失った。中国大陸と台湾が香港の主要なドラマ輸入地となった上に近年韓国ドラマが健闘しており、日本ドラマのシェア減少は免れないだろう。しかし、テレビ局にとって、日本ドラマが信頼できる「視聴率安定剤」であることは変わっていない。起伏の激しい台湾や韓国ドラマと比べて、日本ドラマの視聴率は長期にわたって安定する傾向があり、これは間違いなくテレビ局側及びスポンサーの望むところでもある。

総じて言えば、香港において日本ドラマは番組表の中心となることのない「永遠の二番手」ではあったが、その安定した質により、テレビ各局が信頼を寄せる予備軍として、香港のテレビ放送業界40年余りの歴史の中で変わらず存在してきたといえよう。

(王志垣さんは2006年10月7日～10月20日まで訪問研究員として来日された。)

* 本稿は中国語で提出されたものを王京(PD)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で一部手を加えたものである。

上海で見た、“ものを運ぶ方法”

坂井 美香 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程) SAKAI Mika

今年8月に上海を訪れた。目的はのぞきからくり、操り人形劇、皮影絵を見ること、租界時代の巷間芸能の資料を集めてくることだった。結果、老上海では町の辻々に立って商売をしていたであろう、のぞきからくり(写真1)皮影絵はすっかり観光地の中に馴染んでいた。操り人形劇は上海やその周辺では姿を消していた。資料の方は、上海図書館で写真を撮り(中国では、図書館資料の複写はあまりポピュラーではなく、自分で写真を撮影する)大規模書籍店、古本屋でめぼしいもの計52

冊を買い、最低限のものは手に入れることができた。

しかし、目的のものをみただけ、集めただけでは何も面白くないと、いろいろなものを見てきた。現地の市場、路上売買、いろいろな運搬風景、竹をとことん使うビルの建設現場などである。

現在の上海市は、地下鉄、軌道車が整備され、最新の都市交通システムが存在する一方で、旧来の“ものを運ぶ方法”をそのままに見ることができる。それでは、上海で見かけた“ものを運ぶ方法”いろいろを紹介したい。

写真1



のぞきからくり

写真2



地下鉄に乗る鶏



まず、一番目には地下鉄である。地下鉄には人が乗るのは当たり前だが、人の手によってさまざまなものが運ばれる。左官や清掃業の商売道具、生きたロブスターや鶏も運ばれる。駅で鶏を逆さまにぶら下げて歩く人を見かけた。地下鉄に乗せられ床におかれた鶏たちは不思議なことに座ってどこへも走って行かない(写真2)

道路ではさまざまな種類の車が走ってものを運ぶ。大八車、自転車、バス、トラック、そして自動二輪も人や物を運ぶ。

以下に、日本では見かけない三輪車三種を紹介しよう。名付けて、自転車タイプ(写真3) 原付タイプ(写真4) オート三輪タイプ(写真5)である。それぞれに特徴を見ることができる。自転車タイプは、逆L字型のブレーキと取り付け位置に注目して欲しい。原付タイプは、座面が椅子式になっている。オート三輪タイプは、自動二輪を改造した三輪車に車体をうまくかぶせ、人を運ぶ。い

ずれも手作り感があり、一台一台どこかが違っている。

最後の“ものを運ぶ方法”は天秤棒を担ぐ人(写真6)である。荷担ぎに天秤棒が道具として用いられている。多く見かけるわけではないが、桃やナツメを平ザルに載せて運び、そのまま路上に置いて商いをするにも天秤棒は便利に使われている。警察の見回りが来るとさっと場所を移動する。

上海は、運ぶ道具に限らずいろいろなものが混在する場所だ。中国では、経済成長期のかつての日本と同様に、新しいもの、便利なもの、価格の高いものに価値を認める。それにもかかわらず、従来の道具が生きている。それは、人々の暮らし方がそう大きく変化をすることなく、知恵を巡らす生活に支えられていることを示すのだろう。

三輪車(自転車タイプ)

写真3



写真5



三輪車(オート三輪タイプ)

写真4



三輪車(原付タイプ)

写真6



天秤棒を担ぐ人



実験展示開催報告

実験展示

あるく 身体の記憶

日時：2007年11月1日(木)～30日(金) 10:30～16:30

* 11月3・4日を除く日曜・祝日は休館

* 第3回国際シンポジウムにあわせて、2008年2月23日(土)・24日(日)にも開催予定

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室

主催：神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

趣旨：(1) COEの研究課題である図像、身体技法、環境・景観の体系化という成果を、展示という形で社会に還元し、非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を、研究者だけでなく広く市民に向けても発信する。

(2) 発信にあたっては展示制作途中の市民による評価の導入など、市民が参加して展示を作り上げる展示手法や、展示が持つ視覚、聴覚、あるいは言語といった様々なバリアを超える展示手法など、展示に「実験」を試みる。



主な研究活動

(2007年8月～11月実施分)

研究推進会議

- 第6回 9月21日・2008年度後継組織(暫定)予算要望(案) 研究成果報告書の刊行方法、海外提携研究機関招聘若手研究者の受け入れについて 他
- 第7回 10月19日・本年度外部評価委員および評価日程について、COE終了後の事業継承・発展計画について、最終成果報告書・データベース進捗状況について 他
- 第8回 11月28日・データベース掲載の共通様式およびホームページ掲載に伴う諸問題について、COE終了後の事業継承・発展計画について 他

全体会議

第3回 9月28日・研究成果報告書の刊行方法について、COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」終了後のあり方について、只見町との「映像資料及び写真活用に関する覚書と映像利用許諾書」について 他

第4回 11月 9日・COEプログラム終了後の事業継承・発展計画について、本年度外部評価委員及び外部評価日程について、最終成果報告書・データベース進捗状況について、調査研究協力者の登録について、実験展示の開催について 他

研究会

全体

第3回 9月28日・王 京 COE研究員 (PD)「関東大震災と航空写真」

第4回 11月9日・國弘 暁子 COE研究員 (PD)

「ブリティッシュコロンビアにおける先住民と『ベルダーシュ』に関する調査報告」

・小野地 健 COE研究員 (PD)「クシャミと人類文化」

班(課題)

* 課題名の表記は略称です

7月28日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会

8月18日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会

8月19日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会

8月23日・5班「実験展示」研究会

8月24日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会

9月 2日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会

9月19日・5班「実験展示」研究会

10月 1日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会

10月 8日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会

10月 8日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会

10月 8日・5班「実験展示」研究会

10月13日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会

10月20日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会



現地調査

中村 ひろ子	東京都目黒区 (10月12日)
--------	-----------------

実験展示に使用する資料の調査

中村 ひろ子	東京都町田市 (11月9日)
--------	----------------

平成19年度全国大学博物館学講座協議会東日本部会大会への出席



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2007年8月～10月）

タイトル	発行所
F-GENSジャーナル No.8、9	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
印刷博物館ニュース No.27	印刷博物館
柿右衛門様式陶芸研究センター 論集3号 シンポジウム講演録 ニューズレター No.9	九州産業大学21世紀COEプログラム 「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」
ニューズレター No.11 オープン・フォーラム「漢字文化の今4」報告書	京都大学21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」
ニューズレター No.17	京都大学大学院法学研究科 「21世紀型法秩序形成プログラム」
ニューズレター No.10	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援研究拠点」
Integration of Comparative Neuroanatomy and Cognition	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「心の解明に向けての統合的な方法論構築」
ニューズレター No.11	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
CARLSニューズレター No.1	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム 「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」
紀要「人間文化」第21号 ニューズレター No.6	滋賀県立大学人間文化学部 静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
ニューズレター No.11	東京大学21世紀COEプログラム 「心とことば 進化認知科学的展開」
ニューズレター No.22、23、24 平成18年度実績報告書	東京工業大学21世紀COEプログラム SIMOT「インスティテューショナル技術経営学」
Wind Effects News No.16 Wind Effects Bulletin No.15	東京工芸大学21世紀COEプログラム風工学研究センター 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」
2006年度研究成果報告書 2006年度CISMOR国際ワークショップ 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」(日本語版/英語版)	同志社大学21世紀COEプログラム 「一神教学際的研究センター」
平成18年度最終成果報告書	豊橋技術科学大学21世紀COEプログラム 「未来社会の生態恒常性工学」
ニューズレター No.10 報告集 No.9 「正倉院文書の訓読と注釈・請暇不参解編(二)」 報告集 No.10 「平城京史料守勢(二)」 報告集 No.11 「正倉院文書にみる古代日本語」	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
「雙松通訊」No.8	二松学舎大学21世紀COEプログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
ニューズレター No.4	日本福祉大学プロジェクト21世紀COEプログラム 「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」
ORCNANA報告書「日本舞踊教育2007 高校・大学を中心に」 ORCNANA報告書「研究発表会・シンポジウム2006/2007」	日本大学芸術学部芸術研究所
福島県立博物館平成19年度企画展図録 「樹と竹 列島の文化、北から南から」	福島県立博物館
JSPSサイエンスフォーラム報告書	藤田保健衛生大学21世紀COEプログラム
研究成果報告集「国際日本学」No.5 国際日本学研究所紀要「国際日本学研究」No.3	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
ニューズレター No.7	法政大学国際日本学研究所 「超低侵襲標的化診断治療開発センター」
「科学技術動向」No.76、77、78	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター
かいじあむ通信7号	山梨県立博物館
遼寧省博物館編集<清明上河図>研究文献彙編	遼寧省博物館

COE 調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、今年度のCOE調査研究協力者として追加委嘱された方々です。

氏名	所属部局・職名	所属課題班
上田 純広 UEDA Sumihiro	鹿島建設株式会社 ITソリューション部グループ主事	人間活動と災害の痕跡解読
海賀 孝明 KAIGA Takaaki	株式会社わらび座 チーフエンジニア	身体技法の比較研究
鄭 淳英 CHUNG Soon Young	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程	マルチ言語版『絵引』編纂

2007年度 海外提携研究機関の訪問研究員

本プログラムより招聘される若手研究者は、約2週間、それぞれの研究課題にそって調査研究を行います。

訪問研究員

氏名：グラウジョール・カルロス GLAUJOR Carlos
 (サンパウロ大学大学院日本語・日本文学・日本文化専攻修士課程)
 受入れ期間：2007年10月1日～10月17日
 研究課題：民族性 沖縄からブラジルに渡った人と文化

氏名：許 海華 XU Haihua (浙江工商大学日本語言文化学院教員)
 受入れ期間：2007年10月10日～10月23日
 研究課題：画像資料に見られる明代中国人の日本認識

氏名：ペトルッチ・マリア・グラッツィア PETRUCCI Maria Grazia
 (ブリティッシュコロンビア大学博士課程)
 受入れ期間：2007年10月28日～11月11日
 研究課題：日本の海賊とポルトガル商人の宗教的・経済的關係について



COE支援事務担当

下記の事務員が新しく加わりました。
 共に編集業務を担当します。よろしくお願いいたします。



関屋 彩子
SEKIYA Ayako



七澤 裕美子
NANASAWA Yumiko

お詫びと訂正

17号に掲載した記事について下記のように訂正します。

P.29 現地調査

王京 (PD) 7月17日の調査先：
 鹿島建設株式会社 東京都公文書館 に訂正

P.30 受贈資料一覧

発行所 東京工芸大学21世紀COEプログラム風工学研究センター：
 「都市・建築物へのウィンド・インフェクト」
 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」 に訂正

P.31 COE調査研究協力者

協力者氏名：高坂嘉隆 高坂嘉孝 に訂正

編集後記

この号がお手元にとどくのは年明けのことだと思います。このCOEもその2ヶ月余り先、3月末にはおわります。この年末からその3月末にかけて様々な報告書や資料集が十数冊刊行されます。このニュースレターもあと1冊で刊行終了です。まだ気をゆるめるわけにはいきませんが、少しほっとしています。巻頭の座談会でお伝えした2月のシンポジウム、年度末のせわしない時期の催しになりますが、ぜひご参加下さい。(香月)

ニュースレターに携わり、早いもので3ヶ月が経ちました。この18号の制作に最初から関わらせていただき、無事発行されたことを大変嬉しく思います。さて、ここでみなさまにお知らせがあります。長年ニュースレターの編集に携わってこられた関さんに待望の女の子が誕生しました。おめでとございます！ベビーちゃんはかなりのおっぱいさんだそうで、将来が楽しみです。そして今回、特集で使わせていただいた挿絵は、本年度の訪問研究員の西村真志葉さんに描いていただきました。お忙しい中どうもありがとうございました。(関屋)

入場
無料

第3回 神奈川大学COE国際シンポジウム

「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新天地」

これまでの2回の国際シンポジウムを承け、研究成果を踏まえた新たな情報発信の試みを公開提示するとともに、本プログラム活動全体を総括するイベントになるように企画しています。

日時：2008年2月23日(土) 10:00～17:40
24日(日) 10:00～17:45

会場：神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール
プログラム：<1日目>

セッション 「マルチ言語版『日本常民生活絵引』の
編纂刊行」

セッション 「租界、神社の遺跡から過去の実態を
読み解く試み」

セッション 「インターネット・エコミュージアムの可能性
地域研究と情報学の連携」

<2日目>

セッション 「身体技法および感性の資料化と体系化」

セッション 「身体技法を展示する」

総合討論

主催：神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究
のための非文字資料の体系化」研究推進会議

プログラムの内容については変更になる場合もございます。
シンポジウムの詳しい内容については本誌9頁をご覧ください。

研究成果報告書

Report on the Result,
*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday
Life in Medieval Japan compiled from picture
scrolls, vol.2*

『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』
第2巻(本文編・語彙編)

本文編 2007年3月発行 A4判 216頁

語彙編 2007年6月発行 A4判 106頁

(2冊の合本として配本いたします)

編集：第1班「画像資料の体系化と情報発信」



「景観」と「環境」について の覚書

*Reports on "Landscapes" and
"Environments" Taken from
Fieldwork*

2007年12月発行

A4判 85頁

編集：第3班

課題1「景観の時系列的研究」

課題2「環境認識とその変遷
の研究」



環境に刻印された人間活動 および災害の痕跡解読

*Interpretation of the Traces of
Human Activity and Natural
Disasters Inscribed into the
Environments*

2007年12月発行

A4判 177頁

編集：第3班

課題3「環境に刻印された人
間活動および災害の
痕跡解読」



すべての発行主体は神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

外国語学研究科 中国言語文化専攻

The Course of Chinese Language and Culture,
Graduate School of Foreign Languages

下記の日程で租界史研究会を開催しました。

日時：2007年12月13日(木) 18:30～20:30

場所：神奈川大学17号館52室

課題：「領事裁判研究の新視点」

報告者：中網 栄美子氏(早稲田大学)

吉井 蒼生夫氏(神奈川大学)他

共催：神奈川大学大学院中国言語文化専攻

神奈川大学共同研究助成金租界研究グループ

各研究所・研究科 問合せ

刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)

中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

非文字資料研究 No.18

発行日 第18号 2007年12月31日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661

Fax.045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>